

# ニュースレター

2003年7月10日発行  
 関東学院大学 キリスト教と文化研究所  
 〒236-8501  
 神奈川県横浜市金沢区六浦東一丁目50番1号  
 TEL: 045-786-7873(研究所直通)  
 発行者: 森島牧人  
 (Director: Makito Morishima)

INSTITUTE FOR THE STUDY OF CHRISTIANITY AND CULTURE KANTO GAKUIN UNIVERSITY

## 研究所第二期目を歩み出すにあたって

所長 森島 牧人

2001年10月13日に発足しましたこの「キリスト教と文化研究所」も、早いもので無事第一期目を終え、第二期を歩みだしました。大変な創設期を担っていただきました各学部から選出された第一期所員の方々のご努力に感謝いたします。この第二期は、文学部から選出の所員(矢嶋道文教授、富岡幸一郎助教授、森島)、経済学部から選出の所員(安田八十五教授、村上顕教授)、工学部から選出の所員(精木紀男教授、松田和憲助教授、L.G.ボンド助教授)、法学部から選出の所員(影山礼子教授、村椿真理助教授)、人間環境学部から選出の所員(所澤保孝教授、大豆生田啓友専任講師、帆苺猛助教授)、および2名の研究員(飛田伸一特約教授、高野進特約教授)と16名の客員研究員、総勢31名のスタッフで歩みだすこととなりました。

今期に入り先の新しい陣容のもと、従来ありました三つの研究プロジェクト(①「いのちを考える」、②「奉仕教育における課題と実践」、③「キリスト教と日本の精神風土」)および資料委員会共に、活発に活動を始めております。その一端は本紙面において各研究プロジェクトの責任者から報告があると思います。

本研究所では、こうしたテーマ別の研究活動を進

めるとともに、第一期におきまして大変意義ある成果を見せてくれました資料委員会の研究作業を、さらに充実したものにしてゆきたいと考えております。そして本年度もシンポジウムを10月に、また公開セミナーを来年2月に、そして研究所報第2号を2004年3月に刊行する等々、計画を進めております。

また今期は日々の活動の活性化を願って、所長の下に、各研究プロジェクト責任者、資料委員会の責任者、広報部門の責任者(HP関係)、出版部門の責任者(紀要関係)および事務からなる運営委員会を月に一度招集し、全体の調整を計っております。

最後に、この7月に計画されております、2003年度「アーツ&クラフツ運動とセツルメント運動」国際シンポジウムの宣伝を、この紙面をかりまして行いたいと思います。と申しますのも、この国際シンポジウム開催は、関東学院大学が後援し、「人間環境研究所」と「キリスト教と文化研究所」とが共催する初めての企画であり、またそのテーマはわたしたちの関東学院に深く関係するものだからです。

さて、関東学院がかつて、昭和の初め頃(1928年頃)、横浜にセツルメントを開いたことは、「関東学院百年史」にも載っていますので多くの方がご存知のことと思います。わたしは、これこそ関東学院

### 目次

■ 所長よりご挨拶「研究所第二期目を歩み出すにあたって」……………1
■ 2003年度各研究プロジェクト活動計画
「キリスト教と日本の精神風土」グループの活動について……………2
いのちを考える研究プロジェクト活動計画……………3
奉仕教育における課題と実践研究プロジェクト今年度方針と報告……………3
2003年度資料委員会活動予定……………3

■ 客員研究員の広場
「いのち」を考える授業プランと実践……………4
■ ホームページ開設案内……………8
■ 研究員・客員研究員のご紹介……………8
■ 第3回アーツ・アンド・クラフツ・セツルメント国際会議のご案内……………8

らしさであり、関東学院の歴史において、その神学教育史と共に決して忘れてはならないものであると思っています。この神学教育とセツルメントこそは、横浜バプテスト神学校を創設し、”He lived to serve”とその墓石に刻まれたR.ベネット先生と、学院のモットー「人になれ 奉仕せよ」を残された坂田佑先生、この両先生の教育における精神を具現化したものにほかならないからです。関東学院らしさのルーツ、関東学院教育の原点であると思うからです。しかし、まことに残念なことに関東学院は、それら両者をその歩みの中で切捨て、放棄してきました。いま、セツルメント運動に思いをはせるとき、それはただ単なる幻ではなく、実験教室であったと思います。単

に高邁な理念を教わる場ではなく、ただ単に同情する場でもなく、ただ単に慈善・愛隣に尽くすのではなく、まさに共に生きるその空間の只中で、それぞれが一個の人間として共に学びあい共に成長しあう、その意味での関東学院教育の現場であり、建学の精神の実験室でありました。学院のアイデンティティ、学院の個性が叫ばれる昨今、このシンポジウムが“Service Learning”という、わたしたちにとって古くて新しいこの観点から、再度学院教育に関して考える一助になればと願っております。

これら研究所の活動の上に、皆様のご支援を宜しくお願い申し上げます。

#### 2003年度活動計画1

### 「キリスト教と日本の精神風土」グループの活動について

世話人 精木 紀男

2002年度は、定例的に開催した4回の研究会に加えて、年度の活動を総括するような形で、特別に公開研究会を1回開きました。その成果は、＜幕末維新期のバプテストを中心としたプロテスタント宣教師と日本の出会いと、パリ宣教会によるカトリックの再布教＞をテーマとした公開研究会の記録という形で、研究所の所報第一号「キリスト教と文化」に掲載されました。

このような定例的な研究会の活動とともに、グループのメンバーによる地道な研究成果も投稿されました。このことから、このグループの研究活動の立ち上がりは、一つの形が作られたように思われます。

今年度も昨年同様、次のテーマを研究の軸とすることになりました。

- I 宣教師達の伝道活動を通して見た日本の精神風土
- II キリスト教からみた日本の仏教
- III 靖国神社をめぐる諸問題
- IV その他

2002年度の成果をふまえて、2003年度も活動の形式を踏襲し、原則として、隔月の最終土曜日の午後1時～3時までを定例研究会とすることにしております。

今年度、すでに第一回の研究会（近年の植村正久研究・帆苺猛所員）を、5月31日に開催しました。第二回は、7月19日に予定し、帆苺所員の「近年の植村正久研究（その2）」を予定しております。2002年度が幕末維新期を主テーマにしましたので、引き続いて、日本の近代国家形成期がテーマとして深められることとおもわれます。

また、リサ ゲイル ボンド所員からは、キリスト教と仏教との関わりについて、研究中であり、今年中に一つの成果を披露したいとの申し出がありました。秋頃に発表いただける予定です。さらに、このグループに参加を希望してこられました所員、研究員、客員研究員も新しく増えましたので、ますます活発な活動のできる2003年度であることを期待しております。研究会は公開ですので、お誘いあわせてご参加ください。

なお、本年度は、研究所の特別行事に位置付けられた、特別研究会または講演会をこのグループで企画することになっております。研究活動の進展をみながら、実りある企画が出来るように、皆様のご協力や、ご意見をいただけることを期待しております。

#### 2003年度活動計画2

### いのちを考える研究プロジェクト活動計画

松田 和憲

2003年度、新しく客員研究員を2名加えて新たな気持ちで迎えた5月6日、顔合わせを兼ねた第一回目の研究会にて今年度の方向性を話合った。その結果、今年度のテーマは「いのちのリアリティを子どもが育つ場から考える」というところの的を絞りこんだ。そのテーマを踏まえ5月28日に『いのち』を考える教材と授業実践」と題し、客員研究員である安達昇先生（小学校教員）による報告を聞く研究会を開催した。安達先生には子どもに「いのち」について教える時のワークシート、いのちの色の考察や、子どもが書いた詩などを紹介していただいた。実際に小学校の教育現場で試行錯誤しながら実践されている先生の話は大変興味深く、

参加者全員が真剣に聞き入るほどであった。また最後の質疑応答では、宗教教育との関わり合いや、現代の子どもが死の場面に直面することの少なさを補う試み等々が活発に話し合われ、有益な話し合いの場となったことを感謝したい。今年度は、前掲のテーマにもとづき、その内容を様々な角度から取り上げ、活発な意見交換、研修ができればと願っている。

今回は7月23日(水)大豆生田啓友先生による「保育の場から『いのち』を考える」と題する発表を企画している。聴講自由なのでぜひご参加いただければと思う。

#### 2003年度活動計画3

### 奉仕教育における課題と実践 研究プロジェクト 今年度方針と報告

高野 進

2002年度は、上記テーマについて、現場の学校へのアンケート調査を行いました。その結果の報告と分析解説は、当研究所 所報「キリスト教と文化」に掲載致しました。

2003年度は、上記テーマに関する教科書教材の分析研究を行うことにしました。国内の小学校、中学校、高等学校の教科書から始めて、海外における教科書の分析までを計画しています。また上記テーマに関する国内外における最近の研究書においても分析紹介する予定です。

手始めに、日本の文部科学省検定済である各社発行の中学校教科書の国語、公民、道徳の検討から始めることにしました。これらの研究成果は、段階的にはありますが、教育現場に還元できるようにしていきたいと願っております。またこれは関東学院の建学の精神と校訓の具体化に沿う研究となりましょう。さらに今日の混沌とした社会において、公共性と他者への思いやりの形成に、いささかなりとも、貢献できることと考えております。

#### 2003年度活動計画4

### 今年度の資料委員会活動予定

村椿 真理

資料委員会は5月15日今年度最初の定例委員会を開催し、今年度活動計画について改めて協議しました。委員会構成では、藤原怜子先生にかわり文学部教授、矢嶋道文先生が所員として加わって下さった他、客員研究員として聖書と訳史の研

究者、川島二郎氏が新年度から参加下さることになりました。今年度も委員会は資料の発掘、収集、保管整理の働きを継続しますが、貴重な歴史的資料の購入については、次回までに各委員からの情報を集め、前年度同様に取り組むことにしています。

収集資料の範囲をある程度限定して探し続けても、必ずしも直ちにそれらを発見できないこともあり、また偶然思いがけない貴重古書を見つけるような場合もあります。臨機応変な判断が求められるところでは。

委員会ではその他、この夏も、残されている旧研究所の図書整理作業を行う予定です。夏期休業期間のようですが8月に3回ほどの作業を予定しています。また提案されてきた共同研究については年度後半より取り組む予定で、委員の中から各自の専門テーマに基づいた発表をいただくようなプランを目下検討しています。感謝なことに委員会の構成員が次第に幅広く増え、それぞれの専門も多様性を持つに至りました。そこで皆がひとつのテーマについての学びを行うのではなく、それぞれの研究成果の一端を相互に紹介し合うような折りをもちたいと考えました。前年度末に委員会が入手したブラウン訳聖書などについても、今回客員研究員になられた川島先生に改めてお話を伺う機会などを是非もちたいと願っています。また、英国バプテスト宣教師ホワイトの新資料を通して

の研究についても、同様に委員の一人にお願いし、それを発表していただく機会を持ちたいと考えています。相互に学びの時を持ちつつ、資料収集の活動を地道に継続できれば幸いです。(写真は、最近入手した、聖書『志無也久世無志与』明治15年、第3版)



## ■客員研究員の広場

5月28日「いのち」を考える研究プロジェクトより報告

### 「いのち」を考える授業プランと実践

安達 昇（客員研究員）

#### 1 授業プランの必要性

子どもたちは「いのち」にかかわりのある事件が起きるたびに情報を仕入れ話しかけてくる。その一方で子どもたちは「むかつく」「きれる」「あなたには言われたくない」に代表される直線的な言葉の世界に生きている。子どもは「きれる」と相手に対して行動を起こし「無視」したり「いじめ」たり、あるいは殴りそうな衝動に駆られるという。また「あなたには言われたくない」と関係を断ち切る。「いのち」の大切さを声高に子どもに解いてみても子どもの心に届くことはかなり困難である。このことは「いのち」の危機が叫ばれているにもかかわらず、一方では「いのち」を育て、考え、

生きていく力になる授業プランがないという事実を突きつけられていた。

#### 2 授業プランの意義と視点

子どもたちに「いのち」について考えることのできる授業プランを何とかして作りたいと思った。しかし授業プランはたやすいものではない。今野喜清は授業プランをすすめるにあたって『「いのち」とは何かと問うことは、「人間」とは何かを問うに等しく、永遠の謎解きに挑戦することではないかと』とその難しさを認めた上で、「いのち」の有限性と社会性、つながり、共生、社会性について考えて意義を明らかにしている。

教材開発の視点としては「共感」「共学」「共生」を基本として押さえ、学習の場面としては「道徳」の時間、学級活動、国語などの教科、総合学習「いのち」の学習課題に活用できる学習プランの開発を考えた。また、学習の対象者としては小学生から大学生まで使うことのできる質の高い内容をめざした。

### 3 学習のすすめ方と展開

学習をすすめるにあたって大切にすることは次のことである。

- ・「多様性を知る」「他者を受容する（他者の視点から考える）」「自分を表現する」
- ・自分と向き合う場としてのワークシートの活用
- ・学習方法として参加体験型の手法を取り入れる
- ・話し合いを大切にしてお互いの内容を深める
- ・学習の終わりに「振り返り」をして自分を見つめる

### 4 授業実践

○教材名「作ってみよう『あいたくて』—わたし—」  
(6年生) 2時間

詩の学習で「いのち」に迫ることができないか考えた。創作を通して自分の「いのち」と向き合い、生きていることを表現することにした。表現しようとする詩の題は「あいたくて」とした。

教材の目標は自分と向き合い、生きていることを表現する。

学習の流れは次の通りである。

- ・ワークシートに「あいたい」という言葉に対する一人ブレインストーミングをする
- ・ブレインストーミングで書き留めた内容をみんなに発表する
- ・工藤直子の「あいたくて」を音読する。詩の感想を発表する
- ・「あいたくて」の言葉を生かして詩を創る
- ・自分の詩をグループで発表し、認め合う
- ・振り返りをする

思ったり、感じたりしたことを一人ブレインストーミングをした後「あいたいと思うのはどんなこと

ですか」と聞いてみた。すると多くの手が挙がった。

「わたしの赤ちゃんの頃の自分」

「宇宙人にあいたい」

「大人になって自分が赤ちゃんを生んだときの自分にあいたい」

「未来の自分に会ってみたい」

「ちょっと恥ずかしいけど結婚する人に会いたい」

等、楽しそうな反応があった。そこで子どもたちに

『『あいたくて』という題の詩を創ってみませんか』

と呼び掛けた。子どもたちは書けそうというサインを送ってくる子どももいたが書き方がわからないという反応する子もいた。

そこで工藤直子の「あいたくて」という詩を紹介した。何回か音読した後

「あいたくてという言葉をかすといひよ」

「ブレインストーミングで書いたことをつないでいくと詩になるよ。まずそこから始めてごらん」

と話した。子どもたちは「そんなことで書けるかなあ」という表情をしたが思い思いに書き始めた。

「あいたくて」という言葉を大切にしながら気持ちを表現していった。子どもたちの詩には「あいたくて」という自分の気持ちと言葉が重なっていった。

「あいたくて」という言葉を大切にしながら気持ちを表現していった。子どもたちの詩には「あいたくて」という自分の気持ちと言葉が重なっていった。

「あいたくて」という言葉を大切にしながら気持ちを表現していった。子どもたちの詩には「あいたくて」という自分の気持ちと言葉が重なっていった。

「あいたくて」という言葉を大切にしながら気持ちを表現していった。子どもたちの詩には「あいたくて」という自分の気持ちと言葉が重なっていった。

「あいたくて」という言葉を大切にしながら気持ちを表現していった。子どもたちの詩には「あいたくて」という自分の気持ちと言葉が重なっていった。

「あいたくて」という言葉を大切にしながら気持ちを表現していった。子どもたちの詩には「あいたくて」という自分の気持ちと言葉が重なっていった。

「あいたくて」という言葉を大切にしながら気持ちを表現していった。子どもたちの詩には「あいたくて」という自分の気持ちと言葉が重なっていった。

「あいたくて」という言葉を大切にしながら気持ちを表現していった。子どもたちの詩には「あいたくて」という自分の気持ちと言葉が重なっていった。

「あいたくて」という言葉を大切にしながら気持ちを表現していった。子どもたちの詩には「あいたくて」という自分の気持ちと言葉が重なっていった。

「あいたくて」という言葉を大切にしながら気持ちを表現していった。子どもたちの詩には「あいたくて」という自分の気持ちと言葉が重なっていった。

「あいたくて」という言葉を大切にしながら気持ちを表現していった。子どもたちの詩には「あいたくて」という自分の気持ちと言葉が重なっていった。

「あいたくて」という言葉を大切にしながら気持ちを表現していった。子どもたちの詩には「あいたくて」という自分の気持ちと言葉が重なっていった。

「あいたくて」という言葉を大切にしながら気持ちを表現していった。子どもたちの詩には「あいたくて」という自分の気持ちと言葉が重なっていった。

「あいたくて」という言葉を大切にしながら気持ちを表現していった。子どもたちの詩には「あいたくて」という自分の気持ちと言葉が重なっていった。

「あいたくて」という言葉を大切にしながら気持ちを表現していった。子どもたちの詩には「あいたくて」という自分の気持ちと言葉が重なっていった。

「あいたくて」という言葉を大切にしながら気持ちを表現していった。子どもたちの詩には「あいたくて」という自分の気持ちと言葉が重なっていった。

「あいたくて」という言葉を大切にしながら気持ちを表現していった。子どもたちの詩には「あいたくて」という自分の気持ちと言葉が重なっていった。

「あいたくて」という言葉を大切にしながら気持ちを表現していった。子どもたちの詩には「あいたくて」という自分の気持ちと言葉が重なっていった。

「あいたくて」という言葉を大切にしながら気持ちを表現していった。子どもたちの詩には「あいたくて」という自分の気持ちと言葉が重なっていった。

「あいたくて」という言葉を大切にしながら気持ちを表現していった。子どもたちの詩には「あいたくて」という自分の気持ちと言葉が重なっていった。

「あいたくて」という言葉を大切にしながら気持ちを表現していった。子どもたちの詩には「あいたくて」という自分の気持ちと言葉が重なっていった。

「あいたくて」という言葉を大切にしながら気持ちを表現していった。子どもたちの詩には「あいたくて」という自分の気持ちと言葉が重なっていった。

「あいたくて」という言葉を大切にしながら気持ちを表現していった。子どもたちの詩には「あいたくて」という自分の気持ちと言葉が重なっていった。

「あいたくて」という言葉を大切にしながら気持ちを表現していった。子どもたちの詩には「あいたくて」という自分の気持ちと言葉が重なっていった。

「あいたくて」という言葉を大切にしながら気持ちを表現していった。子どもたちの詩には「あいたくて」という自分の気持ちと言葉が重なっていった。

「あいたくて」という言葉を大切にしながら気持ちを表現していった。子どもたちの詩には「あいたくて」という自分の気持ちと言葉が重なっていった。

「あいたくて」という言葉を大切にしながら気持ちを表現していった。子どもたちの詩には「あいたくて」という自分の気持ちと言葉が重なっていった。

「あいたくて」という言葉を大切にしながら気持ちを表現していった。子どもたちの詩には「あいたくて」という自分の気持ちと言葉が重なっていった。

だけど  
悲しい心にかくされて  
つらい心にかくされて  
やさしい心にあえなくて  
一日中つらい  
だけど  
楽しい心にあいたくて  
楽しい気持ちになりたくて  
今も心をさがしてる

個人面談の時、やすひろ君の母親は「あいたくて」の作品を読んでしばらく言葉にならなかった。そして「こんなことを考えていたんですか」と一言いった。そして何度も読み返していた。目には涙が光っていた。

#### ○教材名 「『いのち』の色」(6年生) 1時間

「いのち」を多面的に見つめていく教材として「色」に着目をして考えることにした。

教材の目標は人間が活着ているときの有様を「いのち」の色として考え、その時々を色で表現することによって一人ひとりを認めあうことができるとした。

学習の流れは次の通りである。

- ・ワークシートの「いのち」に色を表現する
- ・わけを書き発表する
- ・いろいろな場面での「いのち」の色を表現する
- ・グループで発表し、認め合う
- ・振り返りをする

子どもたちにワークシートを配った。最初の「いのち」の場面だけを見せて次のように問いかけた。「あなたの『いのち』に色があるとしたら何色ですか。『いのち』の色を色鉛筆で表わしてください。そしてわけも書いてください。」

子どもたちは「なにっー」という顔をし、少しとまどった様子だったが、すぐに色鉛筆を取り出して考え始めた。しばらくすると楽しそうにかきはじめた。かきあらわしていくうちに子どもたちの表情が変化していくのが分かった。そして自分

自身の「いのち」の色ができていった。子どもたちに聞いてみた。多くの子どもの手が拳がった。子どもたちは「いのち」の色を見せながら「わたしは黄色です。明るく生き生きしている感じだからその色にしました」

「僕はピンク。明るくて元気だという様子を表わすような色だったから」

「わたしも同じピンクです。暖かい感じを表わし、幸せそうだからその色にしました」

「わたしはみんなと少し違う。『いのち』は一つの色ではないと思う。人には気持ちというのがあるから、ハッピーなときの赤と悲しい、いやだという時のブルーがあると思う。ふつうの時の気持ちはその真ん中の緑にしました。」

「僕は、自分がみた色すべてだと思う。人はいろいろな色を見ているのでそれが『いのち』になるんじゃないかな」

子どもたちからはたくさんの「いのち」の色が発表されていった。

「それでは、嬉しい時や悲しい時や寂しい時などではいのちの色はどのような色になるのだろう」

子どもたちはいろいろな場面の「いのち」の色をワークシートに表わしていった。そしてグループで、お互いの色のわけを発表し理解を深めた。子どもたちは質問したりして自分の色と比較したり、同じ色であることの確認をして笑顔になったりしていた。グループでの話し合いにはたくさん意見が出てなかなか終らなかった。その後みんなに、話し合っただけ気がついたことを発表していった。

「わたしのグループではうれしいときはほとんどみんな明るい色だった」

「それに、うれしくなるにつれて色が薄くなっていった」

「緊張しているときは頭の中が真っ白でなにも考えられない。暗い感じの色は自分の心も暗くなっている感じがする」

「やってみてわかったことは、それぞれ顔と同じように『いのち』の色も変化する」

「付け加えなんだけど、『いのち』の色で人間は自分の気持ちを伝えることができる」

「寂しいときって心の中は空っぽだ。自分の気持ちによってちがうなんてすごいな—と思った」  
そこでもう一つ子どもたちに聞いてみた。  
「『いのち』の色を表わすのに色の違いがでてきているけど、どうして同じだったり違いがでてきたりするのだろうか」  
「それは感じ方がちがうから」  
「似ているけど同じ人はいないから」  
「一人ひとりちがうから」  
「わたしは個性があるからだと思う」  
「それに考え方がちがうから」  
多くの発言が子どもたちからなされた。

振り返りシートに学習の感想を書いてもらった。  
「やっぱりいのちの色は表現によってちがう。うれしいときはとても明るく、悲しいときは暗い。でも、もしみんな同じ色だったら、考えることも同じで気持ち悪いと思う。でも、うれしいときは明るく悲しいときは暗い色というのはみんな一緒だった。どうしてだろう」（ゆみ）  
「きょうのいのちの勉強『いのちの色』というのは振り返ってみて、よく考えたら人それぞれのいろいろな個性があり、考えることがちがうから問題が起こったりするんだと思いました」（ひろみ）  
「きょう勉強したことはいのちの色についてです。僕はいのちの色は自分が今までみた色すべてだと予想しました。理由は今までみた色が集まってできてくると思うからです。もし、これが本当だとしたら人間は1秒でも死ぬまでいのちの色が増え続けることになります」（けんすけ）  
「いのちの色という勉強はとてもおもしろく、みんなとこういうのはそうじゃないんじゃないかとか相談できるからよかったです。みんなとこうやって話し合いたい。あと、自分の気持ちの色のことを少し学んだかなと思う」（まい）

授業が終わった後、何人もの子どもたちがやってきて、学習の感想を話しはじめた。その輪が広がり、続いた。ある子はたくさん考えられた。友達と同じ色でうれしかった。みんなの前で発表できてう

れしかった。なぜ色がちがうのか考えているとも話してくれた。語る子どもたちにはそれぞれの思いがあり、話は切れ目なく続いた。

子どもたちと学習する前には「いのち」の色を聞いたら多分、赤に集約されるだろうと考えていた。ところが子どもたちの「いのち」の色を見た時すぐにその予想は否定されていった。子どもたちの「いのち」との向き合いは一つの色として捉えることにとどまらず多様な内容を秘めていた。その後の話し合いも自分の「いのち」の色を伝えると同時に相手の色の背景を受け入れようとする学習へと発展していった。一人ひとりが「いのち」の色の違いを自分の生活や経験と重ねていき、人の個性というところへと発展して考えていった。そのため話し合いも活発で、お互いの違いを認め、受け止めることができる学習へと進んでいった。わたしにとっても、子どもたちと同じ地平で、自問自答しながら学ぶことができた。

#### ○授業実践をして

開発をした教材をもとに授業をした。「いのち」の授業は子どもたちの意欲を刺激するものであった。子どもたちは「いのち」について受け止め考えていった。このことは「いのち」の学習が子どもたちの関心を引き起こし、成立することの証でもあった。答えのない学習に子どもたちは創造力や経験を通して向き合い、深めていった。またワークシートへの書き込み、参加体験的な手法での学習展開は子どもたちの学習への参加を促し、話し合いを活発にした。私自身も子どもたちの意見に耳を傾けながらともに考えていくことができた。

#### 5 終わりにかえて

「いのち」の授業プランや教育実践は始まったばかりである。出版を通して多くの人たちが「いのち」を考える授業プランを必要としているという事実もわかった。今回は「いのち」との出会い、「いのち」のつながり、「いのち」がかがやく、「いのち」がゆらぐ、「いのち」との別れ、という時間系列で教材を配列したがもっともっと多様で多面的な授

業プランが必要である。また、今回は報告できなかったが総合的学習としての「いのち」については内容を早急に検討し、実践的課題とする必要があるだろう。今後、授業プランの開発と教育実践が進めば「いのち」は将来的には「人権科」カリキュラムの大きな柱になると考えられる。

○開発した授業実践プラン

今野喜清 安達昇編著『「いのち」を考える授業プラン48』 小学館 2000



生徒が塗ったいのちの色のイメージ

▶ ホームページ開設のご案内

昨年12月にホームページが開設いたしました。今後研究会の案内や報告など、順次お知らせしていきますので、是非ご覧下さい。

<http://kgujesus.kanto-gakuin.ac.jp>



▶ 研究員のご紹介

2003年度、新しく入られた研究員・客員研究員の先生方をご紹介します。

『キリスト教と日本の精神風土』研究プロジェクト—— 飛田 伸一（工学部特約教授）

『奉仕教育における課題と実践』研究プロジェクト—— 高野 進（経済学部特約教授）

▶ 客員研究員のご紹介

『資料委員会』プロジェクト—— 川島 二郎（日本バプテスト横浜教会員）

—— 坂田 創（元関東学院中・高教諭）坂田日記研究

『いのちを考える』研究プロジェクト—— 安達 昇（小学校教諭）

『キリスト教と日本の精神風土』研究プロジェクト—— 藤原 久仁子（山梨学院大学非常勤講師他）

▶ 第3回アーツ・アンド・クラフツ・セツルメント国際会議のご案内

「近代日本の芸術と社会」

■日 程：2003年

7月25日（金）～26日（土）横浜＜関東学院大学＞フォーサイト 21大会議室

7月28日（月）～29日（火）大阪市立社会福祉研修センター

■主 催：関東学院大学人間環境研究所・関東学院大学キリスト教と文化研究所

大阪市社会福祉協議会 デザイン史フォーラム

■後 援：関東学院大学

大阪大学 21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文学」

■問合せ先：〒236-8501 横浜市金沢区六浦東1-50-1